新潟県下越地方における横屋－堅屋複合町屋の分布及び外観類型
DISTRIBUTION AND DESIGN CHARACTER OF “YOKOYA-TATEYA MIX TO MACHIYA”
IN KAETSU REGION, NIIGATA PREFECTURE渡辺 篤史*, 岡崎 篤行**
Atsushi WATANABE and Atsuyuki OKAZAKI

The pupose of this paper is to clarify the number and the percentage of remaining Yokoya-Tateya mixed Machiya in Kaetsu area, and to understand design character of this building. Major results are as fillows:1) No Yokoya-Tateya mixed Machiya exist in nothern and southern Kaetsu region. On the other hand, there are many Yokoya-Tateya mixed Machiya in Naka-kanbara district and western Kita-kanbara district. It may be inferred that Yokoya-Tateya mixed Machiya was formed from Tateya. One of the reasons is becouse no Yokoya-Tateya mixed Machiya can be found in towns which are consisted purely of Yokoya.2) Several types of facade design are extracted from 740 Yokoya-Tateya mixed Machiya.3) As seen in old paintings and photographs, most Machiya in Niigata were Tateya in the late Edo and early Meiji period. The townscape changed in the mid meiji period, and many Yokoya-tateya mixed Machiya emerged.

Keywords : *Town scape, Machiya, Yokoya, Tateya, Syumoku, Niigata Prefecture*
町並み, 町屋, 横屋, 堅屋, 撞木, 新潟県

1. 研究の背景と目的

全国各地で歴史的町並みを活かしたまちづくりが進められているが、その一つとして町屋を中心とした町場の町並みがあげられる。町屋については、地域性が把握しにくいと言われ、農家と比べると全国規模での体系的な研究が立ち遅れている¹⁾と言われおり、体系的な把握が必要である。例えば町屋の町並みの特徴を表現する上で「妻入・平入」は複数の既往研究^{1)~2)}で述べられているとおり、重要な要素のひとつである。特に都市計画の観点では、伝建地区の保存計画にも記載があるとおり、町並み景観の整備を図る上で基本的な項目になる。一般的に建造物の棟の向きを表す用語として妻入及び平入^{注1)}が用いられるが、妻入、平入という表現では町並みを適切に言い表せない場合があり、本研究では佐渡市相川における町屋研究⁴⁾と同様に前面道路に対する棟の向きによって堅屋と横屋^{注2)}を用いることとする。

新潟県における町屋の棟向きに関する研究⁵⁾において、県内の主要な町場の町屋を妻入と平入に大別したものがあがるが、筆者らがやってきた歴史的建造物群に関する基礎的かつ広域的な調査^{6~9)}では、新潟市文化財旧小澤家住宅¹⁰⁾をはじめ、下越地方を中心に前面道路側が2階建横屋とその後方に堅屋が複合した町屋（以下、横屋-堅屋複合町屋）が多数見られ、町屋の一様式を成していた。このようなものは全国的にあることが知られているが^{注3)}、各集落における調査はあるものの、その分布は局所的に変化する場合もあ

ることから、広域的に各集落を網羅的に調査することが必要である。また、新潟県内において、町屋の内部空間に着目した研究^{13~14)}はあるが、外観形態に関するものはない。

そこで、本研究は新潟県下越地方における横屋-堅屋複合町屋の分布と、各集落における典型的な外観類型を明らかにした上で、その中心都市、新潟町^{注4)}を対象に成立時期と普及要因を推測する。

2. 研究の概要

2-1. 対象地概要

下越地方は新潟県北部に位置し、概ね明治期における岩船郡、北・東・中・西蒲原郡の範囲である。下越地方には村上や新発田、村松、峰山の城下町や瀬波や岩船、沼垂、新潟の湊町があり、これらや他の地域を結ぶ街道が発達し、街道沿いには多くの在郷町がある。また、かつては船運が発達し、河川沿いにも在郷町がある。

2-2. 横屋-堅屋複合町屋の概要（表1）

新潟県下越地方における横屋-堅屋複合町屋の広く知られたものとして岩船郡関川村下関の撞木造りが挙げられる。撞木造りは18世紀後半に上位階層が建造物の外形^{注5)}がT字型で屋根の棟が堅屋と横屋が複合したものを先駆的に取り入れ、20世紀に入ってから前棟二階建て・後棟一階建ての最も小型で簡潔な形式が生み出されたことによって普及したと言われている¹¹⁾。また、屋根の形状は乗越屋根のものが多く見受けられる。

* 新潟大学大学院自然科学研究科 大学院生・修士(工学)

** 新潟大学工学部建設学科 教授・博士(工学)

Grad. Stud., Grad. Sch. of Science and Technology, Niigata Univ., M.Eng.
Prof., Dept. of Civil Eng. and Arch., Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr.Eng.

一方、旧新潟町を中心に見られる横屋-堅屋複合町屋は、多くが外形がI字型で、屋根形状は切妻が多い。後述するように、もともと堅屋であったものが行政指導により前棟が横屋になったものと考えられ、撞木造りとは成立要因が異なる。

そこで本研究では、屋根の棟が堅屋と横屋が複合したもののうち、撞木造りの代表的な形態である外形がT字型のものを除いたものを研究対象の横屋-堅屋複合町屋とする。

なお、関東から南東北一円にかけてみられる店棟造りは店棟を住居空間である座敷棟から明確に分離しており、構造的に独立し、通り土間が外部空間で、外形がI字型である¹⁾ ことなどが横屋-堅屋複合町屋と異なる。福井県三国町のかぐら建ては屋根形状が主として片流れ-切妻である点で異なる。

2-3. 研究の方法

調査対象とする集落は先行研究^{6~9)}で調査を行った主要街道^{注6)}及び河川沿いの町場のうち歴史的建造物^{注7)}の主屋が30棟以上^{注8)}確認できた図1に示す66箇所とする。なお、調査対象集落は、いずれも第二次世界大戦中大規模な空襲をうけておらず、集落全体が壊滅的な被害に至っていない。

調査対象とする集落において、歴史的建造物主屋の棟向きを集計することで、横屋-堅屋複合町屋の割合を算出し、横屋-堅屋複合町屋の分布状況を把握する。ここで、横屋-堅屋複合町屋が10棟以上の集落を対象に外形、階数、玄関面、奥行などの外観調査を行い、その後類型化により地域的な特徴を明らかにする。なお、外観調査は2010年8～12月の期間で行った。

旧新潟町における成立と普及要因を推測するために、棟向きのわかる絵図^{注9)}、明治期の建造物を描いた史料²³⁾、町並み写真、町並みや建築に関する法規制を調査する。

3. 横屋-堅屋複合町屋の分布

3-1. 歴史的建造物主屋の棟向き

調査対象集落のうち56集落において横屋-堅屋複合町屋が確認された(図1)。主屋の棟向きをみると、横屋が大半を占める村上・瀬波においては横屋-堅屋複合町屋を確認することができなかった。また、横屋-堅屋複合町屋が確認されたすべての集落において堅屋が確認できた。後述する通り、新潟町では横屋-堅屋複合町屋が堅屋から派生した可能性が指摘され、横屋-堅屋複合町屋を堅屋に含めると、主屋が30棟以上確認された42集落のうち30集落において堅屋が過半数を占めている。

3-2. 横屋-堅屋複合町屋の棟数と割合

対象地域全体における横屋-堅屋複合町屋の棟数は915棟であった。集落別にみていくと、新潟町が255棟と最も多く、次いで新発田が124棟、沼垂が81棟である。歴史的建造物の主屋に対する横屋-堅屋複合町屋の割合は、亀田が52%と最も高く、次いで下関が50%である。旧岩船郡北部、旧西蒲原郡南部では横屋-堅屋複合町屋はほぼ見られず、下越地方中央部に集中して分布している。特に旧中蒲原郡から旧北蒲原郡にかけて多く分布している傾向がある。なお、既往研究6)と既往研究24)において、街道と横屋-堅屋複合町屋の分布の関係性を指摘されているが、下越地方においては線的というよりは面的に広く分布していることがわかる。

表1 対象地における横屋-堅屋複合町屋の例

外形	I字型	T字型
建物名称	市指定文化財旧小澤家住宅	国指定重要文化財渡邊邸
所在地	新潟県新潟市中央区	新潟県岩船郡関川村
模式図
写真
屋根形状	切妻	乗越
構造	一体	一体
間取り模式図
備考	※上記には増築部を含まない	
建築様式の名称	地元では明確な名称がない	撞木造り
本研究の対象	○	×
建築年	明治初期	文化14年(1817年)

図1 調査対象集落における歴史的建造物主屋の棟向き

4. 横屋-堅屋複合町屋の類型

4-1. 用途による分類(図2)

横屋-堅屋複合町屋を戸建と長屋に分類すると、地域全体では戸

建が740棟、長屋が74棟であり、長屋のほとんどが新潟に集中的に分布している。そこで戸建について外観要素による類型化を行う。

4-2. 戸建の外観要素による類型

横屋-堅屋複合町屋のうち戸建740棟を図3のとおり「外形」、「階数」^{注10)}、「玄関面」^{注11)}、「後棟奥行」^{注12)}の外観要素により分類を行った^{注13)}。結果多様なパターンに類型できたが、20棟以上のものを基本パターンとする。

基本タイプ1～4はそれぞれ外形がI字型、玄関面が前棟平入のものである。タイプ1は前棟後棟の階数が2階-1階で後棟の奥行が長であり、基本タイプのなかで最も棟数が多い。松ヶ崎・沼垂・新潟から村松にかけての一带に分布する傾向がある。タイプ2は前棟後棟の階数が2階-1階で後棟の奥行が短であり、海岸線沿いの集落と新発田から村松にかけての一带に分布する傾向がある。タイプ3は前棟後棟の階数が2階-2階で後棟の奥行が長であり、新潟・沼垂から小須戸にかけての一带と旧岩船郡南部に分布する傾向がある。タイプ4は前棟後棟の階数が2階-2階で後棟の奥行が短であり、43棟のうち新潟27棟と過半数を占めている。基本タイプ5、6は外形がL字型、玄関面が前棟平入、後棟長のものである。タイプ5は前棟後棟の階数が2階-1階で、五十公野において特に高い割合

図2 横屋-堅屋複合町屋の用途による分類

表2 横屋-堅屋複合町屋（戸建）の外観要素による基本タイプ

タイプ名	基本タイプ1(198棟)	基本タイプ2(47棟)	基本タイプ3(164棟)	基本タイプ4(43棟)
写真				
屋根伏				
外形	I字型	I字型	I字型	I字型
階数	2階-1階	2階-1階	2階-2階	2階-2階
玄関面	前棟平入	前棟平入	前棟平入	前棟平入
後棟奥行	長(2.5間以上)	短(2間以下)	長(2.5間以上)	短(2間以下)
分布	松ヶ崎・沼垂・新潟から村松	新発田から村松	沼垂・新潟から小須戸	新潟
タイプ名	基本タイプ5(33棟)	基本タイプ6(23棟)	後棟平入(14棟)	
写真				
屋根伏				
外形	L字型	L字型	—	
階数	2階-1階	2階-2階	—	
玄関面	前棟平入	前棟平入	後棟平入	
後棟奥行	長(2.5間以上)	長(2.5間以上)	—	
分布	五十公野	—	黒川	

を占めている。タイプ6は前棟後棟の階数が2階-2階で14集落で確認できたが高い割合を占めている集落はない。

また、特殊なものとして、玄関面が後棟平入のものが黒川、岩船、桃崎浜、五十公野、沼垂、新潟で確認できた。黒川において特に高い割合を占めている。黒川において間取りを確認したところ、通り土間をもたず、前棟はザシキのみで構成されていた。

5. 新潟町における横屋-堅屋複合町屋の成立過程

5-1. 史料における横屋

新潟町における町屋研究⁹⁾から現代において間口が狭く奥行きが長い縦長横屋は1棟も確認されていないことから、史料で単に

図3 横屋-堅屋複合町屋（戸建）の外観要素による類型化

横屋として描かれていても横屋-堅屋複合町屋である可能性がある。よって、史料における横屋を前棟横屋と表現することにする。

5-2. 絵図にみる江戸期・明治初期の棟向き

江戸期から明治初期の旧新潟町の町並みを描いた絵図を可能な限り収集した^{注14)}。表3は収集した絵図を年代が古い順に示す。

1831年「北国一覽写」は、作者が旧新潟町を訪れて描いたもので本町通では堅屋が複数確認でき、前棟横屋は3棟でそのうち1棟に後棟が確認できた(図5)。1849年「新潟真景」は、新潟町全域で堅屋が複数描かれ、前棟横屋は2棟で後棟は確認できない(図6)。1865年「新潟真景」は、作者が新潟町を訪れて描いたもので横七番町付近で堅屋が複数、前棟横屋が6棟で、うち2棟に後棟が確認できた(図7)。1869年「新斥税関之圖」は新潟町全域で堅屋が複数、前棟横屋は10棟で、うち5棟に後棟が確認できた(図8)。

以上から、新潟町は江戸時代後期には堅屋の町並みであるが、遅くとも北国一覽写が描かれた1831年には横屋-堅屋複合町屋が既に存在していたと考えられる。

5-3. 銅版画にみる明治20年代の棟向き

明治前期の新潟町の様子を、建物1軒毎に示す史料を見つけることはできなかったが、1889年「北越商工便覧」²³⁾から明治期の商家の棟向きがある程度分かる。北越商工便覧の町屋である商家92棟の棟向きをみると、前棟横屋66棟、横屋-堅屋複合町屋13棟、堅屋9棟であり、前棟横屋が約7割を占める(図9)。次に北越商工便覧とほぼ同時期に作製された、1896年「新潟市商業家明細全図」²⁵⁾から立地場所の特定を行うと約6割(70/92)が立地場所が判明した(図10)。角地では横屋-堅屋複合町屋である場合が多い。

また、北越商工便覧とほぼ同時期の1899年に新潟市に滞在した小説家の尾崎紅葉は紀行文で「町で一番繁華な町は古町通、次が本町通で、家が立ち並んでいる。家屋は低く、桁端を通りに向けた妻入りである。」と述べている²⁶⁾。初田²⁷⁾は明治前期の東京銀座の商店・事業所を示す銅版画「東京名家繁昌図録 初篇」について「経済的に比較的ゆとりのある、あるいは発展に対して意欲的である商店、事業所が銅版画に掲載されている」と述べている。このことから、北越商工便覧においても一部の有力な商家が掲載され、実際の町並みは尾崎が見たように堅屋の町並みであったと考えられる。

5-4. 町並み古写真にみる棟向きの変化

明治初期から昭和初期にかけて古町通及び本町通の町並み写真^{28)~30)}を収集した結果が表4である。このうち比較的多くの写真が収集できた古町5番町では、少なくとも大正中期に前棟横屋が見られ、同様に古町6番町では少なくとも明治中期に前棟横屋が見られた。これは、1880年(明治13年)の大火が一つの要因と考えられる。古町8番町では明治中期の時点で既に前棟横屋があったことがわかる。また、本町14番町では昭和初期まで堅屋の町並みであるが、これはこの地区が1880年に新設された遊郭であり、他の町丁とは異なり堅屋の町並みが維持されたと考えられる。

5-5. 景観政策による棟向きの変化

新潟町において景観に配慮した定めが出されたのは1872年に新潟へ赴任した楠本正隆が新築をする者に対して1873年「秣島榛島江新規家建之定」を定め、そのなかで「庇ハ三尺通り、腕木留メニ限り候事」と庇の幅の統一を行ったことが最初である。「右之通家建出来難キモノハ住居不相成候事」と条文の通りに家が建てられな

図4 調査対象集落における横屋-堅屋複合町屋(戸建)の外観要素による分類

表3 横屋新潟町の町並みが描かれた絵図一覧

名称	年代	場所	棟向き		分析対象
			前棟横屋	堅屋	
新潟町之図屏風	江戸期	不明	複数(1)	不明	-
北国一覽写 出羽越後	1831	本町通	3(1)	複数	○
		横七番町付近	複数(0)	1	
新潟真景	1849	新潟町全域	2(0)	複数	○
新潟湊之真景	1859	横七番町付近	複数(0)	不明	-
新潟真景	1865	横七番町付近	6(2)	複数	○
新斥税関之圖	1869	新潟町全域	10(5)	複数	○
新潟県下 越後摘誌	1877	新潟税関後方	不明	不明	-
新潟港日和山真景	1881	日和山周辺	不明	不明	-
越后新潟真景招魂場	不明	不明	不明	不明	-

注 数値は棟数、括弧内は前棟横屋のうち横屋-堅屋複合町屋の棟数

図5 北国一覽写(1831年)

図6 新潟真景(1849年)

図7 新潟真景(1865年)

図8 新斥税関之圖(1869年)

図9 北越商工便覧 前棟横屋(左)

横屋-堅屋複合町屋(右)

ることから、東京式には横屋であることは含まれないと考えられる。

以上から、東京式とは底なしであると推測され、1908 年の大火を契機として町並みは堅屋の庇ありから前棟横屋底なしへと一変したと考えられる。

6. 結論

(1) 横屋-堅屋複合町屋は下越地方の岩船郡北部及び西蒲原郡南部にはほとんど見られず、旧中蒲原郡から旧北蒲原郡西部にかけて多く分布している傾向がある。横屋が大半を占める村上・瀬波においては横屋-堅屋複合町屋は確認できず、横屋-堅屋複合町屋が確認されたすべての集落において堅屋が確認できたことから、横屋-堅屋複合町屋は堅屋から派生した可能性を指摘できる。

(2) 外観要素による分類でもっとも多いタイプは外形が I 字型、前棟 2 階建て、後棟平屋、玄関面が前棟平入、後棟の奥行が長のもので 198 棟見られた。

(3) 旧新潟町は江戸時代後期から明治初期にかけて堅屋の町並みであったと推察され、明治中期から前棟横屋（横屋-堅屋複合町屋）を確認できる。また、1908 年（明治 41 年）の市内建築要項が横屋-堅屋複合町屋の普及に影響を及ぼした可能性を指摘できる。

(4) 本研究は都市計画的視点からの研究であり、例えば横屋-堅屋複合町屋の成立過程について、堅屋の一部を増築し横屋-堅屋複合町屋としたのか、堅屋全部を改築したのか不明確であり、構造や間取りなど建築史、建築計画分野からの詳細な研究が今後期待される。また都市計画的視点からも他地域との比較が必要である。

謝辞

本稿を作成するにあたり、調査及び資料整理に協力をいただいた北元裕子にお礼申し上げます。

注

注 1) 参考文献 3) によると、妻入とは大棟と平行な方向に入口のあること、すなわち建物の妻側に入り口がある場合をいい、平入とは大棟と直角方向に入口があること、すなわち建物の平側に入口がある場合をいう。

注 2) 参考文献 3) によると、堅屋とは山形県庄内、岐阜県西部、北陸地方において妻入民家のこと。間口が狭くて細長いからではなく、棟筋が道と直角になっているからであろう、とある。また、横屋とは岐阜県西部、北陸地方の民家において平入のこと、とある。

注 3) 全国的には類似形態として、新潟県関川村下関の撞木造り¹¹⁾、福井県三国のかぐら建て¹²⁾、関東から南東北一円にかけての店棟造り¹⁾等がある。

注 4) 新潟市中央区に位置する、明治初期の新潟町のことである。

注 5) 上空から俯瞰した建造物の形状を外形と呼ぶこととする。長方形の場合を I 字型、曲屋などを L 字型、撞木造りなどを T 字型とする。

注 6) 主要街道とは参考文献 15) に掲載された街道である。

注 7) 本研究では、概ね 1945 年以前に建てられた建造物と定義する。概ねとする理由は、目視で簡易的に調査するため正確な建築年を把握することが困難で、また様式で判断するため具体的な年代で判断することができないためである。

注 8) 30 棟以上とする理由は、ある程度の棟数がないと各集落の棟向きの傾向がわからないためである。この方法の場合、旧岩船郡北部では対象集落が少なくなるため、旧岩船郡のみは 10 棟以上とした。

注 9) 参考文献 16 ～ 22) の他、個人所有の資料である「新潟港日和山真景(1881)」及び「越后新潟真景・招魂場（年代不詳）」を調査した。

注 10) 前棟と後棟それぞれの階数を調査した。図 3 では、(前棟階数)-(後棟階数)で階数を示した。

注 11) 玄関の位置が前棟にあるものと後棟にあるものの分類と、棟と玄関面の位置を調査した。

注 12) 「後棟奥行」は敷地条件による影響も考えられるが、本研究での外観はファ

サードのデザインだけでなく、建物全体のボリュームによる形も含めたものと捉えていることから、類型項目としてに含めた。

注 13) 本研究では外観類型のみで分類したが、今後建築年代も含めた詳細な分類が必要である。なお、新潟においては旧小澤家住宅が明治前期に建築されたことと、現存する「横屋-堅屋複合町屋」のいくつかについてヒアリング調査を行った結果、昭和初期に建築されたものが多かった。

注 14) 絵図収集に際して新潟市歴史博物館伊東祐之氏にアドバイスを頂いた。

注 15) ■は判読できなかった文字である。

参考文献

- 1) 大場修：近世近代町家建築史論，中央公論美術出版，2004. 12
- 2) 宮本雅明：都市空間の近世史研究，中央公論美術出版，2005. 2
- 3) 彰国社：建築大辞典，彰国社，1993. 6
- 4) 大庭裕雅，岡崎篤行：鉦山町相川における歴史的建造物の残存状況および外観特性，日本建築学会技術報告集 No. 331 pp693-696，2010. 6
- 5) 鈴木哲，山崎完一，岡章，佐藤正道：新潟の町家の平入り・妻入りに関する調査研究，日本建築学会北陸支部研究講演梗概集 F，pp249-252，1985. 6
- 6) 佐藤憲明・岡崎篤行：新潟県岩船郡における歴史的建造物群の残存状況と外観特性—下越地方の街道沿いを対象として—，その 1，日本建築学会計画系論文集 No. 610，pp. 141-146，2006. 12
- 7) 五十嵐浩：新潟県における歴史的建造物群の残存状況とその建築特性—北蒲原郡地域の街道沿いの集落を対象として—，新潟大学大学院自然科学研究科修士論文，2005. 2
- 8) 加藤健二・岡崎篤行：新潟県下越地方における歴史的建造物群の残存状況と建築特性—中蒲原・東蒲原両郡地域を対象として—，日本建築学会北陸支部研究報告集 第 49 号，pp. 449-452，2006. 7
- 9) 渡辺篤史・岡崎篤行：新潟県下越地方における歴史的建造物群の残存状況と建築特性—新潟市及び西蒲原郡を対象として—，日本建築学会北陸支部研究報告集第 50 号，pp. 359-362，2007. 7
- 10) 新潟市建築設計協働組合：新潟市文化財旧小澤家住宅整備工事報告書，新潟市，2011
- 11) 財団法人観光資源保護財団：鐘木造りの町並と米沢街道—新潟県関川村の村づくり—，日本ナショナルトラスト，1988
- 12) 玉井哲雄：近世地方都市における町並の形成—越前三国湊の町家と都市構造—，建築史学第 3 号，1984. 9
- 13) 小林勉，西村伸也，阿部元：沼垂（ぬつたり）町・新潟町のせがい造りを持った町家の室空間構成と使われ方の研究—阿賀野川流域の他の町家とのせがい造り形状の比較—，日本建築学会計画系論文集 No. 551 pp. 115-122，2002. 1
- 14) 檜垣友映，大場修：新潟古町の花街建築の建築的特性，日本建築学会大会学術講演梗概集，建築歴史・意匠，pp289-290，2013. 8
- 15) 小村式：図説 新潟県の街道，郷土出版社，1994
- 16) 芳明：新潟町の図屏風，新潟市歴史博物館所蔵，年代不詳
- 17) 長谷川雪旦：北国一覽写，新潟県立図書館所蔵，1831
- 18) 翠柳斎：新潟真景，紫錦堂藏版，新潟大学附属図書館所蔵，1849
- 19) 井上文昌：新潟湊之真景，新潟市歴史博物館所蔵，1859
- 20) 行田魁庵：新潟真景，北方文化博物館所蔵，1865
- 21) 勝川九斎：新斥税関之圖，新潟県立図書館所蔵，1869
- 22) 鈴田平造：新潟県下 越後摘誌，新潟大学附属図書館所蔵，1877
- 23) 川崎源太郎：北越商工便覧，龍泉堂，1889
- 24) 大庭裕雅：新潟県中越地方北部における歴史的建造物群の残存状況と外観特性—町屋を中心とした町並みに着目して—，新潟大学大学院自然科学研究科修士論文，2011. 2
- 25) 小山信次郎：新潟市商業家明細全図，新潟県立図書館所蔵，1896
- 26) 尾崎紅葉：煙霞療養，春陽堂，1904
- 27) 初田亨：繁華街にみる都市の近代—東京，中央公論美術出版，2001
- 28) 沢村洋編：写真集・新潟の街 歴史散歩，新潟日報事業社，1980
- 29) 新潟日報事業社出版部編：写真集 ふるさとの 100 年（新潟），新潟日報事業社，1980
- 30) 新潟日報事業社出版部：新潟県の 100 年ふるさとの 100 年総集編 1 ～ 5，新潟日報事業社，1985
- 31) 新潟新聞：当市家屋新築注意，1908. 10. 27
- 32) 岡田有邦：新潟繁昌記，精華堂，1886
- 33) 新潟市史編纂古代史部会編：新潟市史 通史篇 3，新潟市役所，1996

DISTRIBUTION AND DESIGN CHARACTER OF “YOKOYA-TATEYA MIX TO MACHIYA” IN KAETSU REGION, NIIGATA PREFECTURE

Atsushi WATANABE and Atsuyuki OKAZAKI***

* Grad. Stud., Grad. Sch. of Science and Technology, Niigata Univ., M.Eng.

** Prof., Dept. of Civil Eng. and Arch., Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr.Eng.

Kaetsu region is the northern part of Niigata prefecture. Major towns in this area are three castle towns(johka-machi);Murakami, Shibata, Muramatsu, and four port towns(minato-machi); Senami,Iwafune,Nuttari,Niigata. Additionally, there are many small towns in countryside(zaigoh-cho) along major roads and rivers. Many historical buildings remain in these towns.

One type of historical building is Machiya, which is traditional merchants' commercial and residential building. External form of Machiya is classified into two types; Tateya whose ridge of the roof is vertical to the attached street and Yokoya whose ridge is horizontal. Besides, there is Machiya that is mixture of Tateya and Yokoya in Kaetsu area. The front part of this Machiya is Yokoya, and the back part, which is predominant, is Tateya.

The pupose of this paper is to clarify the number and the percentage of remaining Yokoya-Tateya mixed Machiya in Kaetsu area, and to understand design character of this building. Major results are as fillows:

- 1) No Yokoya-Tateya mixed Machiya exist in nothern and southern Kaetsu region. On the other hand, there are many Yokoya-Tateya mixed Machiya in Naka-kanbara district and western Kita-kanbara district. It may be inferred that Yokoya-Tateya mixed Machiya was formed from Tateya. One of the reasons is becouse no Yokoya-Tateya mixed Machiya can be found in towns which are consisted purely of Yokoya.
- 2) Several types of facade design are extracted from 740 Yokoya-Tateya mixed Machiya.
- 3) As seen in old paintings and photographs, most Machiya in Niigata were Tateya in the late Edo and early Meiji period. The townscape changed in the mid meiji period, and many Yokoya-tateya mixed Machiya emerged. This might be a result of building guidelines proclaimed after the two great fires.

(2015年8月10日原稿受理, 2016年1月8日採用決定)